

自閉症幼児における動作法導入初期のプロセスについての検討

～二項関係から三項関係の成立を目指して～

榎木田祥代*・菊池 哲平

The Development Process of Child with Autism in the Early Periods of Dohsa-hou

Sachiyo ENOKIDA and Teppei KIKUCHI

(Received October 3, 2011)

The purpose of this study was to examine the development process of child with autism in the early periods of Dohsa-hou in 4 days psychological rehabilitation camp, especially, the progress of relationship between client and therapist. The client was 4-years-old boy with autism showed anxiety and hyperactivity, resisted to being touched by the therapist. In addition, the client was not able to keep eye contact. As Dohsa-hou sessions progressed, he gradually felt soothed, looked around himself. We discussed that the client could address the tasks in Dohsa-hou, because he acquired dyadic relationship among the therapist. Then, the client could address on new tasks in Dohsa-hou (e. g., UDEAGE, HIZA-DACHI) aimed to establish triadic relationship. In conclusion, Dohsa-hou included the processes of acquiring the dyadic relationship, therefore, it is necessary to devise how to exchange with clients.

Key words : young child with autism, diadic relationship, triadic relationship, Dohsa-hou

I. 問題と目的

自閉症児に対し最初に動作法が適用（大野, 1974）されて以来, 動作法を適用することによって自閉症児が抱える多くの側面が改善・向上することが示唆されてきた。当初, 動作法は脳性まひ児を始めとする肢体不自由児に対する訓練法として開発された（成瀬, 1973）が, ダウン症児（田中, 1986）, 学習障害児（佐藤, 1992）, 重度知的障害児（遠矢, 1988; 1990）といった様々な障害児に対して適用が試みられるようになり, 次々にその有効性が示されてきた。特に自閉症児に対しては, 多動性の減少やアイコンタクトの成立についての効果が報告されたことを皮切りに（今野, 1978）, その他の多くの側面にも著効ありという事例報告が数多くなされてきた。たとえば学習活動への構えの形成（小田・谷, 1994）, 母子間における相互交渉の継続や始発性の増加（笹川・小田・藤田, 2000）, パニックや自傷行動の軽減（清水・小田, 2001; 古賀・中田, 2003）, 要求・報告言語行動の増加（宮本,

2005; 藤田, 2007）など, 自閉症児が示す基本的な障害特性である社会性やコミュニケーション, 感覚過敏や常同行動といった幅広い側面へ動作法が効果を有することが示されている。こうした自閉症児に対する動作法の理論的な背景については, 現在, 共同注意を始めとした対人関係性の発達心理学的知見との整合性が図られるに至っている（e.g., 干川, 2007）。

さらに動作法がもつ基本的なメカニズムは他者とのコミュニケーションが成立するための基本的な要件と合致している（大神, 2000）ことが指摘されている。たとえば動作法適用場面においては, 課題動作と呼ばれる特定の動作に対する指示（動作課題）が言語的/非言語的にセラピストから提示され, その動作を自閉症児が遂行することによって「自己-課題動作-他者」という三項関係が成立している。課題動作を二者間で対象化し共有することで, 子どもは他者が持つ意図に気づき, さらにそうした共有体験を積み重ねることで他者意図への理解を深め, さらに動作遂行に伴うセラピストからのフィードバックによって肯定的な情動が共有される体験へと繋がると考えられよう。そのこと

* 熊本大学大学院教育学研究科

が子どもの他者志向性の高まりや注意集中力の増加に繋がり、前述した様々な側面への効果をもたらすものといえよう。

一方で自閉症児に対して動作法を適用する際に、最も議論として取り上げられるトピックの一つが“動作課題を導入するプロセス”の問題であろう。実際に動作課題を提示する前にセラピストから身体を触られること自体に抵抗を示す自閉症児は多く、特に幼児の場合はその傾向が顕著である。これは感覚過敏の強さからくる触覚防衛として説明される場合もあり、初心者のセラピストが戸惑う要因である。しかしながら、干川（2007）は自閉症児が持つ困難の一つとして「inanimate（人でないもの）な対象は理解しやすいが、人というanimateなものに触られることで不安になる」ことを挙げ、動作法によって他者（セラピスト）から触られることにより他者意図理解が促されていることを指摘している。すなわち、そもそも自閉症児には「自己-他者」という二項関係の段階での躰きが存在し、それに対して“触れる”という行為を行うことで二項関係を成立し、その後に三項関係の成立へと移行していこうというプロセスも動作法には含まれているといえよう。

こうしたプロセスを干川（2007）は「動作法からみた自閉症の子どもの発達段階」として整理している。その第一段階は「他者意図の気づき：やりとりすることが難しい（触られることをいやがる、課題に応じようとしない）」としており、続いて第二段階として「他者意図理解を深める：触れさせてくれるが長続きしない（その時々気分によって応じたり応じなかったりする）」と位置づけている。したがって「触れる-触られる」関係の成立は「自己-他者」という二項関係の成立の基盤となり、そこに課題動作という対象を導入していくプロセスこそが動作法導入期における狙いの一つとなると考えられる。

本論文では、就学前の自閉症幼児に対し3泊4日のキャンプでの事例を紹介し、動作法導入初期における自閉症児の発達プロセスと、動作法導入における留意点について検討することを目的としている。この認定キャンプは、日本リハビリテーション心理学会資格認定委員会が認定している認定キャンプと呼ばれる方式で実施されているが、他都道府県で行われている認定キャンプと異なり、脳性まひ児を始めとする肢体不自由児が中心ではなく、参加者が自閉症およびその他の発達障害児に限定されたキャンプである。そのためキャンプのプログラムが可能な限り自閉症児のために調整されており（スケジュールの提示や環境、活動内容など）、動作法セッションにおける導入プロセスを検討するためには適していると考えられよう。

II. 事例概要

1) 対象児（トレーニー）

対象児（以下A君）は、B市の知的障害児通園施設に通う4歳の男児である。知的障害を有する自閉症の診断を受けている。キャンプは初参加であり、月に1回ある訓練会に参加し始めて1年目である。

2) 実施期間と手続き

200X年8月に行われた3泊4日のキャンプ方式による宿泊集団集中訓練であった。1回のセッション時間は60分で原則として一日3回の計9回であった。1班4・5組のトレーニーとセラピスト、1名のスーパーバイザー（以下、SV）で構成されており、全体では4班編成のうえに総合指導が1名でキャンプが構成された。

3) 生活状況

普段の生活状況を母親からインタビューして把握した。

(1) 活動面

あまりじっとしていることがなく、落ち着きがないとのことであった。好きなテレビ番組を見るときは、座ったり、体全体をあまり動かさずに見ることができると、見ている間も手足は常に動いている様子とのことだった。周りが騒いだり、楽しそうにしていたりすると、それを嫌がるような様子が見られる。水を飲むことが好きなようで、飲みすぎるといふことが多いようである。泣くときは30分程泣き続けるが、その後は落ち着くとのことであった。また、訓練会で保護者と動作課題をすると、一緒に動かしている、合わせているという感覚がほとんどないとのことであった。一緒に動かそうとすると、逆に反発する力が強くなり、どんどんその力が増していくようだ、とのことだった。

(2) 言語面

発声はある。はっきりとは聴き取れないが、好きなキャラクターの真似をして、大きな声で叫ぶことがある。「イヤ」「ママ」など、特定の一語文ははっきり言うことができる。

4) インテーク時の様子と見立て及び手続き

(1) インテーク時の様子

最初はずっと泣いていた。母親のそばを離れることがほとんどなく、泣き叫ぶ様子だった。A君は、泣き疲れた後以外、常に身体を動かしている様子であった。立ったら歩く、走る、ポーズをとるなどして、その場にじっとしていることがなかった。座っている時は、母親のかばんの中身を漁って携帯電話を手にとり

操作したり、タオルを取り出して投げて遊んだりしていた。携帯電話やタオルを母親が取り上げると泣き始める様子であった。セラピストが名前を呼んだり、挨拶を試みたり声かけをしながら近寄ってみたが、母親にくっついたままでセラピストに触らせてくれることは少なかった。また視線を合わせようとセラピストが顔を近づけると、母親の胸や膝に顔を埋め、全く視線を合わせようとしなかった。

(2) インテーク時の見立て

SVのインテークにより、就学前であることも鑑みて、いわゆる動作法の代表的な動作課題ではなく、まずは一緒に遊んだりして、セラピストと安心して触れ合うことが必要であると考えられた。A君が母親から離れずに泣き続け、セラピストが近づくとさらに母親にくっつくことから、A君は触られることに対する不安があるのではないかと思われた。また、母親以外の人とは視線を合わせる様子もなく常に動いていることから、姿勢保持などの課題動作というよりも、まずは注意を限定して関心を向けること、例えば人であるセラピストに関心を持つことができるということや、周囲の環境に関心を向けることができるということが、A君にとって重要であると考えた。そのためには、A君の注意を引き付けることができるような遊びの要素を取り入れたやり取りを行い、徐々にセラピストや周囲の環境に関心を向けることが目標として設定された。すなわち、様々な遊びの状況において、セラピストと一緒に遊びに取り組むことや、セラピストに関心を向けセラピストと合わせて身体を動かすということが、A君にとっての課題ではないかと思われた。そのために、まずはセラピストと触れ合いながら一緒に場にいることができるような関係をつくる必要があると考えられた。

内容としては、SVとの関わりの中で、こちょこちょ遊びや抱き上げてグルグル回る遊びなどといったものでA君の笑顔がよく見られた。そのため、これらの内容を取り入れることとした。また、インテーク時の様子から、セッション開始の母子分離も難しいようであったため、セッション開始の母子分離の方法も工夫する必要があると考えられた。

Ⅲ. 結果

以下に4日間実施した動作セッションを、セッション時間中の内容及び変化を(1)セッション中の変化として記述し、3日目からは課題動作別に記述する。A君の日常生活の全体の様子を(2)1日の変化として報告する。

1) 1日目

(1) セッション中の変化

セッション開始時に母親が離れていくと、A君は「いや、いや」と言いつつ泣き出しそうであった。SVがA君を肩に担いでグルグル回すなど、大きな動きのある遊びをして関わっているとA君は声を出しながら笑いだし、その間に母親は部屋を退室することができた。このような大きな動きのある遊びをすることで、A君の関心が母親よりも身体感覚の方に向くように仕向け、その間に母親が退室することができたのではないかと考えられた。

セラピストもSVと同じようにA君を抱えあげたりしながら関わった。また、A君が寝転がった時には、こちょこちょ遊びや一本橋などの声かけもしながら行った。A君は声を上げながら笑い出し、立ち上がることなく、寝転がったままであった。何回かしていると、こちょこちょをしている間は声を出しながら笑い、セラピストが手を離してこちょこちょをやめると、動きが止まって身構えるような様子が見られた。そこで、こちょこちょをする前に「いーち、にーの、さーん」と合図のようにして声かけをした。「いーち、にーの」の間は動きがなくなり、じっと身構えていた。

A君が座っている時や立っている時は、常に手足が動くため、セラピストはA君の腰の辺りに腕を軽く回し、セラピストの手の届く範囲の中でセッションの時間を過ごしてもらうようにした。座位の時は後ろからセラピストがピタッとA君を抱きかかえ、そのまま「キュー」と声をかけながら抱きしめ、その後「パッ」と言いつつ、A君を離す身体遊びを繰り返した。

SVからは座位になった時や仰臥位の姿勢になった時に、3カウント数えたりなどして、じっとする瞬間を作るようにとアドバイスがあった。A君が体育座りのときは、セラピストが後ろからA君の腕や身体を抱えてピタッとくっついた状態でじっとする瞬間を作った。また仰臥位では、セラピストはA君の視線がセラピストに向くようにA君の頭の方から声かけをしながら、両腕をピタッとくっつけて気をつけの姿勢で仰臥位になるよう促した。サブセラピストにA君の膝を補助してもらい、じっとする瞬間を作った。3カウント目や「キューッパッ」と言ったら、セラピストとサブセラピストは援助を外すという関わりを繰り返した。カウントの最中、この日はA君の身体には反発する力がぐーっと入っていることがほとんどであった。

(2) 1日の変化

開会式やインテークの時に比べ、徐々に泣きもおさまり、セッション中に笑顔が見られるようになった。セラピストと同じ場で一緒に遊ぶということもでき

た。SVからのアドバイスを受け、じっとする瞬間を何回か作ると、3回目のセッションでは、じっとしている時の力が少し抜けていた。インテーク時などには視線が合うことがなかったが、セッション中に視線が合う瞬間が出てきて、セッション外でも視線の合う瞬間が何回かあった。

2) 2日目

(1) セッション中の変化

セッション開始時、母親と離れるときは「いや、いや」と言いながら泣く様子が見られた。しかし、1日目と同じようにセラピストがA君を抱えてグルグル遊びをしたり、船のように身体全体を揺らしたりなど、体を大きく動かす遊びをしていると笑顔になり、その間に母親は退室することができた。

A君の様々な姿勢の中で、「とけあう体験」(今野, 1997) やこちょこちょをし、3カウントなどの声かけを引き続き行った。A君の力が抜けた瞬間にカウントをとるようにし、できたら褒めて遊ぶことを繰り返した。仰臥位の時、カウントした後セラピストが「もう1回やるよ」と言う、自分から足をまっすぐに伸ばし、じっとする姿勢をとることができた。またA君が動いて様々な姿勢をとることを利用して、その時々姿勢に合わせて、あぐら座位、軀幹のひねり、膝立ちや立位の姿勢でのカウントを取り入れていった。カウントもできるだけゆっくり唱えたり、数を増やしていった。

また仰臥位姿勢において腕挙げ課題を導入し、バンザイをしたり、早く腕挙げをしたりゆっくり腕挙げをしたりなど、セラピストが主導する形で取り組んだ。腕を動かしている間、A君と視線が合うようになった。

(2) 1日の変化

60分のセッションをすると母親に会える見通しが持てた様子であり、母親と離れる瞬間は嫌がったり泣いたりする表情をとるが、セラピストが関わるとすぐに笑顔になった。

カウントをとる時、3回目のセッションにいくにつれて、力が抜けていく回数が多く、3秒から15秒程まで長くなっていった。さらに、カウントをとった後、セラピストが「もう1回」と言う、A君から足を伸ばして仰臥位の姿勢をとってくれるようになった。また、セッション中に視線が瞬間的に合うのではなく、じっと合うようになり、セラピストの目をしっかり見ながら腕挙げを1回取り組むことができた。食事や移動の場面においても振り返ってセラピストを見ることがあった。食事の時、これまでは「いただきます」の合図まで待たず、すぐに何かを口に入れていたが、この夕食時では「いただきます」の合図まで待つことが

できた。

SVからは、腕挙げにおいて、いろんな方向に挙げるなど、一緒に動かすことを中心に行うこと、膝立ちで補助を少なくするようにとアドバイスがあった。

3) 3日目

(1) セッション中の変化

①腕挙げ

A君が仰臥位になったら、すぐにサブセラピストがA君の膝を援助し、セラピストとの腕挙げ課題に注意を向けてもらうようにした。バンザイや片腕の挙げ下げはそれぞれ2回続けてすることができ、視線が合ったまま取り組むことができた。セラピストはA君に「せーの」と言いながらトントンと手に合図を送り、マットについた時は「ついたねー」と言って、合図にメリハリをつけるように取り組んだ。腕を上げる速さを変えるなどバリエーションを増やしながら取り組んだ。

②膝立ち

たまたま膝立ちの姿勢がとれそうになった時に、上体を起こすようA君の上体をセラピストが両腕で援助しながらカウントをしていたが、すぐに前に倒れたり、セラピストに身を任せたりすることが多かった。これまで休み時間等で、A君が子ども向けテレビの戦隊シリーズの変身ポーズの真似をしている時に、股関節が突っ張っているような姿勢ではあったが、胸を張り、身体に過剰な緊張を入れている様子が見られていた。そこで戦隊アニメの真似を利用して膝立ちに取り組んだ。A君の膝の前後をセラピストが両足で援助し、「はっ!」と言って真似を促すと、すぐに真似をして上体を自分の力だけで支えることができた。また膝立ちの時に、A君のおしりをセラピストの膝で支え、「コトコトコト」と言いながら徐々に膝立ちの姿勢へと促す方法のアドバイスが総合指導からあった。

(2) 1日の変化

セッション中だけではなく、生活場面でも視線が合うようになった。セッションの始めと終わりのあいさつ時では、静かに正座をすることができていた。セラピストが手遊びをするためにキャンプ参加者大勢の前に立っていると、A君と視線が合い、A君がセラピストの手の動きを真似している様子が見られた。また、一本橋やびたふわでは、A君から手のひらを見せて、要求する様子も見られるようになった。

腕挙げで、視線が合っている時は一緒に動かしている感覚があり、セラピストがわざとスピードを変えたり止めたりすると、セラピストの手に自分の手を合わせて持っていくことができた。視線が合っていない時は、A君が勝手に方向やスピードを決めている様子だった。

あぐら座位や膝立ちでは、力が抜けて静かになるこ

とが多くなり、セッションを重ねるにつれて、カウントの長さも長くなった。また、身体の動きは多少あるが、静かに周りをじっと見渡すような様子がみられた。膝立ちの時にこの状態でカウントすると、最高で30秒程姿勢を保持することができた。

またキャンプの疲れが出てきたのか、セッション中に眠い表情をするようになった。この時は、無理はせずに寝かせるようにした。

4) 4日目

(1) セッション中の変化

①腕挙げ

セラピストが一人で仰臥位の姿勢を援助しようとする、A君は足に力が入り、腕挙げに集中できない様子であった。そのため、サブセラピストと二人で援助を行って、腕挙げをすると、A君と視線が合い、一緒に腕挙げをすることができた。

②膝立ち

膝立ちの姿勢を援助すると、フニャフニャと倒れそうになるが、戦隊アニメの真似を促しながら姿勢を作ることができた。そこからカウントし始めると、じっとして10秒保持することができた。周りを見渡してじっとしていることがあったので、10秒から30秒くらいカウントした。

(2) 1日の変化

カウントが長くとも、待てることが多くなってきた。しかし、セラピストが焦って課題動作の姿勢に持っていくと、反発する力が入ることがあった。このことから、A君と遊びながら関わっている中で、課題動作に近い姿勢になった時に腕挙げや膝立ちの課題に取り組むようにするといいのだと実感した。

こちょこちょなどの遊びを取り入れると、笑顔がでて、セラピストがいつこちょこちょをするのか身構えるときもじっと視線を合わせていた。

セッション以外では、追いかけてこをするようになり、セラピストを振り返ったり、目を見ながら近づいたり遠のいたり、セラピストの動きを伺いながら遊ぶことができた。

IV. 考 察

A君はキャンプ初参加で不安も大きく、開会式は始終泣き叫んでいた。さらに、インテーク時では、セラピストの声かけや触れることに対しても抵抗を示した。これは、干川(2007)「動作法から見た自閉症の子どもの発達段階」の第一段階であると考えられる。SVからの援助もあり、触れることはできたが、やり

とりをするのが難しかった。そこで、まずはA君と一緒にこの場で活動する相手であることや触れられても大丈夫だと安心感を与えることが重要であると考え、たくさん声かけをして、大げさにフィードバックを行い、A君がセラピストに関心を向けるようにした。A君の笑顔がたくさん見える遊びをよくすることで、A君にとってセラピストと一緒にいることが不安ではないと感じることができたのではないかと思われる。また、A君の動きに合わせた活動をすることで、A君の楽しさをセラピストと共有し、セラピストを自分にとって意味のある相手だと意識し始め、視線が合うようになったのではないかと考えられる。このことから、A君はセラピストを他者として位置づけ、二項関係を成立させていたと考えられる。さらに、A君は3日目から、静かに周囲を見渡す行動が現れた。膝立ち課題において、静かにじっとしていることが多くなった。これは、セラピストを他者として意識し始めたことによって、他者志向性が高まりや、注意集中力の増加につながっているのではないかと考えられる。

また、他者に関心を向けるため、さらには触れられて一緒に課題動作を行うという三項関係になるために、まずは少しでもじっとすることができるような課題が重要であると考えられた。そこでカウントなどの声かけをこちょこちょ遊びなどのA君の好きな遊びの中から取り入れることによって、A君はゲーム感覚で取り組んだと考えられる。また、カウントも徐々に数を数える間隔を広げ、ゆっくり数えたりする工夫で、じっとする瞬間を長く保持することができたり、力が抜けた瞬間にカウントをとってほめることで、どういう状態がいいのかということ伝えることになると思われた。この遊びのような課題において、「触れる－触れられる」の関係、つまり「自己－他者」の二項関係の基盤が成立したと考えられる。さらに、カウントをとることに取り組むことで、カウントの間は一緒にじっとするということを共有し、三項関係の始まり、つまり二項関係の成立となったと推測される。そして、このカウントなどを繰り返すことで、腕挙げ課題に取り組むことができたのであろう。3.4日目では、視線を合わせながら、一緒に動かす感覚を得ることができた。これは、A君が「自己－課題動作－他者」という三項関係が成立したものだと思える。「触れる－触れられる」の二項関係から、「触れる－腕挙げ－触れられる」という、腕挙げ課題をA君とセラピストの二者間で対象化し、共有化できたと推察される。このように、二項関係から三項関係へ移行するために、三項関係に至るまでの二項関係での取り組み方の工夫が重要であると思われる。本研究では三項関係の成立に至るまでのプロセスにおいて、こちょこちょ遊びや様々

な姿勢でのカウント課題は、A君にとって有効であったと考えられる。

三項関係の成立をもっと促進していくために、さらに課題動作におけるバリエーションや課題の取り組み方がこれからの課題になるであろう。

謝 辞

3泊4日のキャンプにおいて、スーパーバイザーとしてご指導頂いた、佐藤青史先生に深くお礼申し上げます。また、本稿をまとめるにあたって、報告を快く承諾して下さったA君とA君のお母さまに心より感謝いたします。

参考文献

- 1) 大野清志 (1974) : 「乱暴・けんか・反抗」内山・沢田編著最新生徒指導シリーズ [4. 問題行動の指導] 第4章第1節, 日本図書文化協会, 134-140.
- 2) 成瀬悟策 (1973) : 心理リハビリテーション. 誠信書房.
- 3) 田中新正 (1986) : ダウン症児の動作訓練. リハビリテーション心理学研究, 14, 63-71.
- 4) 佐藤暁 (1992) : 動作法の適用が学習障害児の学習困難に及ぼす効果. 特殊教育学研究 29 (4), 55-59.
- 5) 遠矢浩一 (1988) : 重度精神遅滞児に対する動作訓練法の効果 : 行動と姿勢の改善過程. 特殊教育学研究 26 (3), 57-64.
- 6) 遠矢浩一 (1990) : 重度精神遅滞児に対する動作訓練法の効果 : 訓練継続による効果の増大. 特殊教育学研究 28 (3), 53-59.
- 7) 今野義孝 (1978) : 多動児の行動変容における腕上げ動作コントロール方の試み : 行動変容における弛緩訓練の効果について. 東京教育大学教育学部紀要, 24, 187-195.
- 8) 小田浩伸・谷晋二 (1994) : 動作法による自閉的傾向を持つ精神遅滞児の学習活動への構えの形成. 特殊教育学研究 32 (3), 13-21.
- 9) 笹川えり子・小田浩伸・藤田継道 (2000) : ダウン症児・自閉症児とその母親との相互交渉に及ぼす動作法の効果. 特殊教育学研究 38 (1), 13-22.
- 10) 清水謙二・小田浩伸 (2001) : 自閉症生徒におけるパニックの軽減に及ぼす動作法の効果 : 学校および家庭におけるパニックの頻度の変化. 特殊教育学研究 38 (5), 1-6.
- 11) 古賀精治・中田直宏 (2003) : 自閉傾向をともなう重度知的障害児の自傷行動の機能に及ぼす動作法の効果. リハビリテーション心理学研究, 31 (2), 27-40.
- 12) 宮本 (2005) : 自閉症の児童の報告言語行動の形成に関する研究. 熊本大学教育学部卒業論文.
- 13) 藤田路子 (2007) : 自閉症の子どもの言語発達と動作法との関連に関する研究. 熊本大学大学院教育学研究科修士論文.
- 14) 干川隆 (2007) : 自閉症の子どもの発達を促す動作法の効果 : 共同注意の発達の観点から. 熊本大学教育学部紀要, 56, 19-31.
- 15) 大神英裕 (2000) : 動作学のための基礎理論. 成瀬悟策 (編) 実験動作学, 至文堂, 28-37.
- 16) 今野義孝 (1997) : 癒しのボディワーク. 学苑社.